

新型出生前診断

「陽性なら中絶」5.7%

岡山大調査 羊水検査受けずに

妊婦の血液でダウン症など胎児の染色体異常を調べる新型出生前診断をめぐる、岡山大学のグループが妊婦557人を対象に実施した意識調査で、5.7%にあたる32人が「陽性が出たら出産を諦める」と回答したことが28日、分かった。グループによると新型出生前診断をめぐる妊婦の大規模意識調査は初めて。

陽性の場合、胎児がダウン症である可能性は35歳以上で80〜95%とされるが、最終診断ではない。グループは「(より精度が高く、最終診断の根拠となる)羊水検査などを待たずに中絶してしまうと、安易に命が選別されてしまう恐れがある」と警告している。

岡山大の中塚幹也教授らのグループは、3〜6月、兵庫県や広島県の病院で受診している18歳から44歳の妊婦557人にアンケートを実施した。

回答者は検査方法や精度など診断に関する知識を確認する質問に答えた上で、診断結果の評価などについて回答。陽性の場合、74%が「羊水検査を受けたい」、20.3%が「羊水検査を受けずに妊娠を続ける」としたが、32人が「羊水検査を受けずに出産を諦める」とした。

出産を諦める理由については、59.4%が「少しでも異常の可能性がある」と回答。「週数が進んでからでは胎児がかわいそう」「羊水検査だと流産の可能性がある」という回答も多かった。また「陽性の場合、羊水検査で本当に異常があるか判断する必要がある」とことを理解していると答えたのは、全体の34.5%にとどまった。

新型出生前診断は4月から開始され、全国の26施設で受診できる。妊婦のおなかに針を刺し、流産の可能性もある羊水検査と比べ、血液だけで簡単に

新型出生前診断



妊婦の血液を採取し、胎児のDNA断片を解析することでダウン症の21トリソミー、心臓疾患などを伴う18トリソミーと13トリソミーの計3種類の染色体異常を調べる検査。妊娠10週か

ら検査でき、針を刺す羊水検査のような流産の危険性がない。「陽性」と診断された場合、胎児がダウン症である可能性は35歳以上で80〜95%だが、陰性の場合の中間率は99%以上とされる。費用は自己負担で約21万円掛かる。

十分な説明を

日本産科婦人科学会・倫理委員会副委員長の久貝宏司・東邦大医療センター大橋病院産

婦人科教授の話 妊婦の中には新型出生前診断について理解していない人が多く、事前に十分な説明をしなければならぬ。ただ、理

解した上で中絶の選択をする人もいる。羊水検査を義務化するわけにもいかず、難しい問題だ。新型出生前診断の判定だけで中絶する

人を少しでも減らすために、ほかの検査で異常の可能性があるとさられたり、高齢妊娠だったりした場合などに対象を限定すべきだ。

できることなどから高い関心を呼んでいる。別の臨床研究グループ

の6月末までの集計によると、開始以来1534人が受診し、29

人が陽性と診断された。だが2人は確定診断で異常がなかった。